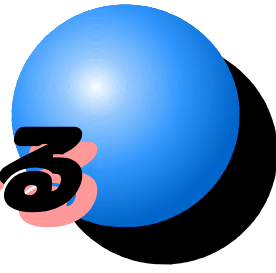




ゆい

まーる



★VOL 18 令和3年11月8日



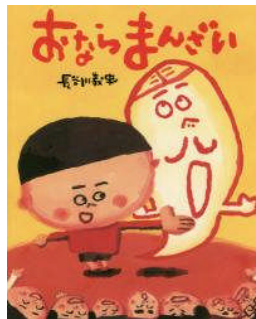
絵本の楽しさをあすそ分け

■「おならまんざい」

長谷川義史／作

ぼくがサツマイモを食べて出た〈おなら〉が「ぼくとまんざいせえへん？」としゃべりだします。さっそく、ぼくはおならとコンビを組み、〈おなら〉をテーマにしたまんざいを始めます。

●関西弁まるだしでダジャレが次々に飛び出すまんざいはおもしろく、子どもに受けること間違いなし！です。●4年前の作品ですが、言葉あそびができる4歳くらいからの子どもに。●子どもの心をわしづかみする長谷川義史さん独特の絵がページいっぱいに広がり、楽しさ倍増。



お金を受け取り、〈想像しだいでどんな帽子にもなるすばらしい帽子です〉という言葉添えてミリーに渡します。●ここからミリーが想像する帽子の物語が始まります。ページをめくるたびにカラフルで見たことのない帽子が現れます。●子どもたちはミリーと一緒にイメージを広げてたっぷり遊びます。最後にミリーが発見する〈あること〉も子どもたちを幸せな気持ちにします。●4歳くらいからおとなにも。

■「おさるのえほん」

いとうひろし／作

おさるのシリーズ30周年を記念して、「おさるのかくれんぼ」「おさる



のおいかけっこ」「おさるのまねっこ」が1冊になって再登場。3作をつなぐために、いとうひろしさんのサービスページもあります。●児童文学者の赤木かん子さんは、「かんのミニミニ子どもの本案内」の中で、「おさるはおさる」は自分が人と違うことの不安というとてもむずかしい、でも現実、いまの日本では確実に子どもたちのテーマになってしまった問題を、5～6歳の子どもにもわかることばとストーリーで、正確に語ってくれるのです…この先10年かそこら、いや、へたしたらもっと

■「ミリーのすてきなぼうし」

きたむらさとし／作

子どもの空想力を引き出す絵本。●ある日、ミリーが帽子屋さんのウィンドウを見てお店に入ります。羽のついた帽子が気に入り、買おうとしますがサイフにはお金がありません。●ここで作者は、ステキなアイデアを用意します。お店のご主人がミリーのために〈特別な帽子〉を出し、空っぽのサイフから見えない

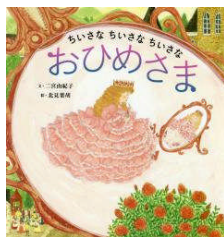


長いこと、このおさるのシリーズを超える幼年文学の作品は誰も書けない気がする…いや、何を書いたらこれを超えられるのか、私には見当もつきません」と綴っています。●いとうひろしさんは、あとがきで〈おさるの物語は、おもしろおかしなお話です。楽しんで読んでください。でもそれは…ぼくがぼくであることの不思議をめぐる物語でもあります。その不思議さについて、おさるといっしょに考えるのも悪くありません〉と書いています。●平和で心おだやかな〈おさるのお話〉を読み手のおとな、読んでもらう子どもそれぞれが楽しめます。3歳くらいから数年おきに読み返すと、感じ取る何かが変わっていきます。

■「ちいさなちいさな ちいさなおひめさま」

二宮由紀子／文 北見葉胡／絵

あり得ないことと勘違いをワザと組み合わせ、落語のような楽しい終わり方にしたお話。●あるお城に、それはそれは美しいお姫さまがいましたが、あまりに小さく、王さま以外の誰にも見えません。●髪をとかそうとすると鼻息で吹き飛びそう…侍女たちはお世話をやめました。庭掃除をする家来たちも落ち葉と一緒に捨ててしまいそう…掃除をいっさいやめました。戦争の訓練もやめました。お城の周りはずるバラで覆われ…。●王さまだけは、目の中に入れても痛くないほどお姫さまをかわいがったので、しっかり見えます。ここまでは〈あり得ない〉こと。●さて、〈勘違い〉の主演は隣の国の王子さま。お姫さまのうわさ…美しい、誰も見たことがない、お城に近づけない、王さまがお姫さまをかわいがっている…。王子は、そんなお姫さまこそ自分の結婚相手と思いこみ…王子のりりしさが〈勘違い〉の度合いを高め、おかしさにつながっています。●4年前の作品。●バカバカしさを楽しめる5歳くらいから。



■「おさる日記」

和田誠／文
村上康成／絵

文と絵をセットで楽しむ作品。27年前の出版ですが、センス

の良さは今も変わらず…です。●大型客船の船員をしているお父さんが半年ぶりに帰ってきて、ぼくにおみやげをくれます…小さなおさるを。●次の日からおさる（もんきち）とぼくの日々が日記形式で始まります。●物語は、再び航海に出たお父さんが、戻ってくる半年間に起きる〈もんきち〉の変化を綴ったものですが、変わっていくさまと最後のページに仕込まれたオチが連動してなるほど！です。●5歳くらいから。



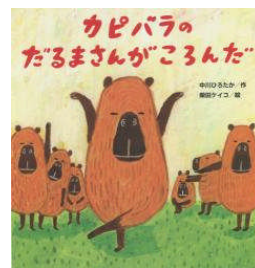
■「カピバラの

だるまさんがころんだ」

中川ひろたか／作
柴田ケイコ／絵

表紙裏側に作者・中川ひろたかさんが

「カピバラをうごかした」という楽しい文があり、〈大きなダルマを持って、カピバラの柵の中に放り投げてみようかな〉というくだりが、この作品にそのまま生きています。●6頭のカピバラが〈だるまさんがころんだ〉遊びをします。動かないカピバラが絵本の中で動いたりピタッと止まったり…中川ひろたかさんのアイデアと柴田ケイコさんのとぼけた味のある絵が一体となり、アッと驚くおもしろさになっています。●2歳くらいからおもしろさが見て分かります。



▶▶▶▶ロビー展示のご案内

●常呂図書館にある「旅がテーマの絵本」を50冊あまり展示しています。●北見市立図書館のホームページ（常呂図書館）で展示している絵本のリストを紹介しています。●絵本を通して、いろいろな〈旅〉をお楽しみください。



本との出会いを

ボーイズ&ガールズに

■「おさるのゆめ」

いとうひろし／作

おさるシリーズ最新作。シリーズから何冊か読み、〈おさるの世界〉を体験してから読むことをオススメします。●今回のテーマは

〈夢〉。おさるのぼくは、南の小さな島でみんなとなかよく暮らしています。朝目覚めたらまずおしっこをして、ごはんを食べ、毛づくろいをして、木登りやカエル投げをしたり、水浴び、そして夜になったら眠る毎日。この変わらない日々が〈心地よい安心〉につながっています。●そんなぼくはお日さまがのぼる前に夢を見ます。不思議なことに、夢の中でも夢を見ます。どんな夢なのでしょう？絵本で紹介した「おさるのえほん」の〈あとがき〉がこの作品でもそっくり生きています。●常呂図書館には、30年分の〈おさる〉シリーズがすべてあります。小学生からおとなまで、多くの人にオススメ！哲学です。



然と感じ取れます。●作者がお話の終わりに用意した〈気持ちの良いひとりぼっち〉で、子どもたちも気持ちよさを一緒に味わえます。すっきりとした絵と人々のあふれる言葉もステキ。小学校低学年・中学年に。

■「クルルちゃんとコロロちゃん」

松本聡美／作 平澤朋子／絵

モノの長さをはかることって楽しい！を伝えてくれる作品。●ちょっとかわいこぶっているコロロちゃんとちょっと乱暴なクルルちゃんは、あることをきっかけ

に友だちになり、その時から2人はいろいろなモノをはかる楽しさに気づきます。●始まりは、手のひらを開いた親指と小指の長さ…2人合わせると30センチ！そこから2人は工夫をして何でもはかることに夢中になります。●このお話を読んで、自分もやってみようと思う子どもがきっといることでしょう。おまけのページと自分の体のさまざまな部分をはかってみてはいかが？のお誘いが裏表紙にあり、楽しみがいっぱい。●小学校低学年・中学年に。



■「すてきなひとりぼっち」

なかがわちひろ／作

教室や友だちから放っておかれるひとりぼっち、人ごみの中

にいるひとりぼっち…主人公のぼくが道で拾ったカメラと一緒に体験する〈ひとりぼっち〉を、ぼくの視点とぼくに関わってくる人々を描写し、ぼくが感じる〈ひとりぼっちのステキさ〉を表しています。●子どもたちは、ページごとの色づかいでぼくの気持ちが分かり、デリケートな〈ひとりぼっち〉を自



■「手にえがかれた物語」

岡田淳／作

毎年、ぼくといとこの

理子ちゃんは夏休みの間、おばあちゃんの家で過ごします。おばあちゃんの家にはあきらおじさんがいて、2ヶ月前に奥さんが病気で亡くなりました。おじさんは、奥さんがベッドでおじさんに語った「あきら、あきらと

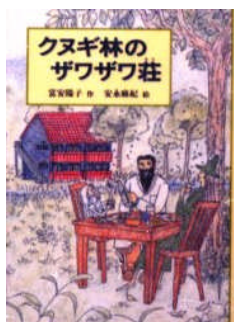


…」という最後の言葉がずっと気になっています。●おじさんは美術の教師。ぼくと理子ちゃんはおじさんを元気づけるために考えました。おじさんに頼み、ぼくと理子ちゃん、おじさん3人の手に絵を描いてもらい、人形劇のようにして空想の物語を始めます。●この作品のおもしろさは、手に描いた空想の物語が勝手に動き出し、それが最後の言葉の続き・意味を知る冒険の旅にむすびつくこと。そして、おじさんが描いた願いを叶えるリンゴの木とリンゴの木を守るワニの存在が物語の奥行きを広げる役割を果たします。●30年近く昔の作品ですが、今は新書サイズの文庫に。小学校高学年から中学生に。

■「クヌギ林のザワザワ荘」

富安陽子／作 安永麻紀／絵

あとがきに、「昔々から日本という国には、たくさんの妖怪が住んでいました…人間と妖怪が対等につきあうことができる…日本は不思議な国でした」というくだりが作品の核になっています。●物語の中心人物は科学者の矢鳴（やなる）先生。先生は、街の豆腐屋で豆腐を作りながら〈空飛ぶ雲〉の研究をしています。●毎日、豆腐屋でもらうおからと牛乳を混ぜたミルクだんごを近所のノラネコたちにプレゼント！物語の始まりは、先生が大家さんにアパートを追い出され、ノラネコたちの協力で、クヌギ林にあるザワザワ荘に引っ越すところから。先生は、ザワザワ荘に暮らすアズキトギや水の精、センタクギツネらの妖怪たちとつきあい、人間の世界と妖怪の世界を行き来しながら、さまざまな不思議なことを当たり前のように体験します。●この作品は30年も前の出版ですが、最近、斉藤洋さんが「クヌギ林の妖怪たち 童話作家・富安陽子の世界」（2021. 6）を書き、まるごと1冊「クヌギ林のザワザワ荘」論を展開、富安陽子さんとの対談も収録しています。



●この本を読むと、おとなになっても富安陽子さんの作品…妖怪たちを介して日常と非日常が入り交じる物語の世界を楽しむ幸福感が伝わってきます。また、斉藤洋さんは対談の中で「私はもう何度も幽霊を見た経験があるし…いたものが目の前で消えるとか、そういうこともあったし…でも、経験があったからといって、存在するとはかぎらないし、幽霊とか妖怪っていうのは…個々人がどう思うかなんですよ」と話しています。●違うページでは、富安陽子さんと斉藤洋さんが描く異界に触れ、富安陽子さんの妖怪の世界は、〈魔界は人界と重なっており、空間を共有〉し、斉藤洋さんのは〈日常世界に突如、瞬間的に現れる異界〉と紹介しています。●2人の〈異界〉物語はたくさんあります。違いを味わい、お楽しみを。●どれも、おとなにもオススメ！

■「オレンジ色の不思議」

斉藤洋／作 森田みちよ／絵

ヒットはしないけれど、斉藤洋さんの〈不思議〉を題材にした作品はたくさんあり、著者の世界を代表する分野の一つです。●物語の始まりは、作家の私に少女が声をかけてきたところからで、〈あやしい〉ものが見えてしまう少女と一緒に〈あやしい〉を体験する連作7編の短編集。いくら速く歩いても前を歩く警官との距離が縮まらない、古いアパートで孤独死をした老人が色々な店で店員とやりとりをする…怖さよりも見えてしまったことの奥にある不思議さの理由に心がひかれます。淡々と綴られるストーリーについて読み進めてしまう…誰もが認めるストーリーテラー・斉藤洋さんのうまさです。●これは「斉藤洋のゴースト・ストリート」シリーズ（他に「水色の不思議」「モノクロームの不思議」）の1冊。4年前の出版で、現在は新書サイズの文庫に。●小学校高学年からおとなまで。一度入り込んでハマると抜け出せません。

